

**令和6年度第1回農業大学校外部評価委員会
議事録（要旨）**

日時 令和6年6月24日（月）14:00～15:26

場所 大分県立農業大学校 会議室

出席者

外部評価委員

大分県高等学校教育研究会農業部会長	佐藤智之
大分県指導農業士会副会長	植木美和
豊後大野市農業振興課長	赤嶺繁素
中部振興局農林漁村振興部長	生野栄城

（欠席委員）

大分県指導農業士会長	池永勝己
大分県農業法人協会会長	上原隆生
農業大学校同窓会副会長	湯浅正徳
J A大分営農担当常務	森本亨

農業大学校

藤田校長、太田副校長、木村次長、有馬部長、手嶋部長、安達教授

議事内容

- ・報告事項「令和5年度重点目標等の取り組み結果」及び審議事項「令和6年度運営方針を踏まえた数値目標と主な対策」について、全会一致で承認された。
- ・委員からあった意見等は以下のとおり
（外部評価委員の発言は○、農業大学校の発言は→で記載）

議事(1) 報告事項 令和5年度重点項目等の取り組み結果について

運営方針1 活気あふれる学園づくり

○県外からの入学生はどのような情報によるものか。

→県内に祖父の実家があることや自分の学びたい分野が住んでいた県ではなかった等の理由が見られる。

○県外から来た学生は卒業後、どうするのか。

→進路指導においては県内での就農や就職の斡旋をしている。

○インスタグラムを見ると学生が楽しそうで好感度が持てる。

→昨年度は各コースで投稿数に偏りがあったので、今年度から各コース毎に1週間に1件掲載するルールで取り組んでいる。また、新たに今年度から YouTube を始め、県外や社会人を含めた若い年齢層をターゲットに情報発信する。

→昨年度までは全寮制、今年度は移行期間ということで希望者はいなかったが、条件によっては通学も可能するとともに家が遠い等の理由のある研修生については入寮を可能とした。フレキシブルに学ぶ環境を整え、情報発信し、入学につなげる。

○少子化の中、また民間企業の景気が良く、企業に生徒が流れて行く中で、生徒を集めるのは大変だと思う。

運営方針2 質の高い教育の提供

○農業技術検定の取得率は低いのか。

→他県では1問1答形式で過去問題に取り組み、工夫して資格取得を後押ししているの、参考にして取り組む。

運営方針3 新規就農者の確保

○就農率の動きはどうか。

→民間企業の景気が良いこと、またJAや農機具メーカー、公務員へ学生が就職する傾向が強くなっており、ここ2年落ち込んでいる。大分県では相対的に農業法人に流れている。

○民間が好調ではあるが、農大なので100%就農率を目指してほしい。

→農協への就職も増えている。民間の動きが速いため、タイミングを考えて取り組む。

○就農が厳しさを見て分かっているのではないのか。将来の不安から安定している方に向くのではないか。

○国全体で今から20年で農業を何とかしないとイケない。農業法人によっては上手くいっているところもあるので、やり方次第かと思う。

議事(2) 審議事項 令和6年度運営方針を踏まえた数値目標と主な対策について

運営方針1 活気あふれる学園づくり

○ある専門学校のオープンキャンパスに行ったが、模擬授業、在校生との相談会、特典の進呈などに取り組んでいて真剣さを感じた。

→昨日にオープンキャンパスを実施したところであるが、収穫体験をして収穫したものはお土産として持って帰ってもらった。また、案内を在学生にしてもらい、楽しそうな雰囲気、活気のある印象を持って帰ってもらうことが大事だと考えている。

○昨日のオープンキャンパスに参加したが、学生が丁寧に説明していた。

→高校訪問に行くがアプローチする回数が少ないので、振興局と連携を密にしていきたい。情報を上げないと選択肢にも上がらない。例えば普通科高校には編入学の実績を示すなど幅広く情報発信をしていく。

○農業高校は今、生徒数が減っているの、それ以外の高校生もターゲットにした方がよい。普通科や、農業以外の産業系、商業や工業の高校にもアプローチしてみると良いのではないか。

運営方針2 質の高い教育の提供

○資格取得については昨年度の委員会が出された意見については対応していただいている。プロジェクトの審査をした際に、質が年々高くなっていると感じた。

→農大と農業法人が連携して、農業法人の課題を一緒に解決していく取組を考えている。学生にとってはインターンシップの体験ができ、法人にとっても農大との連携をPRする場にもなる。

運営方針3 農業の担い手確保

○法人に就職した学生の定着率はどのくらいか。大学生では3年で3割程度が退職すると言われている。

→一般企業への就職と比べても大きな差はなかった。仕事が合わずに退職する学生もいるが、コーディネーターが次の仕事を斡旋している。そこまでフォローしている。企業からは即戦力と言わないまでも職を探している人材がいらないかという相談もある。上手くマッチングすれば両方とも助かる。

○高校中退や不登校の生徒を研修生で受け入れる体制は取れないか。

○農大は教育法上の専修学校であり、高校卒業程度でなければ入学できない。研修部には受け入れる余地があるかもしれない。

→研修部としては過去同様の事例があった際、一般の試験で条件を満たせば入学を許可している。

議事(3) その他 今後の農業大学校のあり方

→入学促進を進めないといけないが、少子化で分母が少なくなる中で農大がどうすべきか、どうあるべきか、担い手を確保するためにこうしてはどうかというご意見をいただきたい。

今年、外国籍の方が1名入学した。これまで新卒者を軸にターゲットとして取り組んでいるが、社会に出た若い人、学び直しを考えている人、日本人学校の卒業生など多様なところへ幅広くPRをかけていくべきと考えている。

大分県では、農家の師弟で農大卒業後すぐに就農する流れが弱い。農業法人で人材を作り、ゆくゆくは独立という流れで、人を作るようにしないとけない。担い手確保のためには出口も考えていかないとけない。

→大きな課題で、国民が農業を大切に思ってくれるよう、市町村、県、国が地道に取り組んでいくことが重要。農業教育も大事で、農業でサラリーマンができると国民が思えるかどうか意識の変革が必要である。